



オジロワシと私

森 信也

昭和三十三年十二月三十一日、斜里海岸に降り立った時、オホーツク海はもう一面真白の流水原であり、流水の頂にハシボツガラスがくり返し、くり返し飛びかうだけの寒々としたところであった。

初めて見る流水がどうしても理解できず、ただぼんやり沖をながめていると今まで見たこともない巨大な鳥が流水を這うように私の方へ飛んで来ては上空高く舞い上がり、北海道特有の真青な空に二メートルは有に越す径翼と白い尾羽根を拡げて飛ぶ様を見、姿を消してから感動が湧き上がり、なんと

すばらしい鳥だろうと心に打ちつけられたのがオジロワシであり、付き合いの始まりでもある。その晩、流水と巨大な鳥に度肝をぬかれ、ツェルトにもぐり込み一夜をかすことにした。しかしその晩は流水の鳴く音や寒さに一睡すらできず開けて新しい年であったが、驚きと寝不足の元且はハマニンニクの穂に群がるユキホオジロになぐさめられた。

オジロワシが知床半島で多く見られることを知ったのは斜里町に勤務してしばらくたつてからである。ここに来ても放浪ぐせはおさまらず、土曜から日曜にかけて年中といつていくらい知床連峰を歩き廻っていた中で、またオジロワシと再会することになる。

正月休み吹雪に会い、テントを飛ばされ、この雪の呈でオシロワシの沢を下りてくると、崎を目がけて舌状の流水の先端が来つつあり、海は大シケとなつていた時にオジロワシがその波頭めがけて、くり返しくり返しダイビングをしている。その数五〇羽を越しており、それに肩羽根が白くオジロワシより少し大きく、良く目立つオオワシも交じつており、なんと海ワシの乱舞といつたところであった。

そんなめぐり合わせのためか特に鳥に興味を持ち始め、本をあさり出したものの、

地の果・知床の本屋では絵本をながめるのがやつとであつた。そのうちにオジロワシについての資料も手に入った。しかし、それは帯広畜産大の芳賀良一先生によつて報告された網走の近くと根室での営業で、ほとんど日本では調査されていなく、世界ですらあまりないに至つては本当に驚かされたものである。

野次馬根性では人後に落ちないたちであるが、こんな魅力ある大型鳥の生きざまを見てやろうと決心するには一瞬であつた。

まず聞き取りから始めたが、なんとウトロ市街地にあるオロンコ岩には昭和十五年頃まで巣があつたとか、私ら香川県から入植した頃は裏の大木に巣をかけてヒナを育てていたとか、ぼんぼん飛びだしてくる。それでは少なくとも知床半島にはまだ、まだヒナを育てているだろうと、半島でサケ・マス漁のために点在する番屋に五月から十月までずっと漁師に聞くのが一番と廻つたら、なんと番屋の裏山にいつも二羽でいるとか、あの岩礁が止まり場で船から捨てる魚を待っている。また、二、三年前に若い者が巢からヒナを持って来て育てたとか、

生きの良い話が次々と聞かされると、もう山登りをやめて原始林を這い廻ることになつた。知床の原始林に一步でも入つた人なら二存じと思うが、背丈を越すクマイザ

サとツタウルシに足をとられたり目はたかれ、あげくのはてはワルシカブレまで背負われる、そのうえ蚊とブヨに刺されたら一カ月は人に見せられた顔ではない。

聞き取りでは、ちよつと捜せば巣はごくぞく見つかると思つていたが、五湖からいくとも奥に入らないうちにころざし一年目は終つた。

何年か歩き廻っているうちに土、日でなんとか観察できる巣が見つかったものの、人間様が嫌いと思つてなかなかのぞけるようなどころには作つてくれない。やむをえず登ることにするのだが、手がまわるような樹はまずない。平均すると樹高二〇メートルぐらいのところにあるために初めは元氣良く登るのだが、半分も行くと手と足がしびれます。何度地面にたたきつけられたことか、あまりいためつけられたのでまた方針を変え、海上からや冬の渡りの観察にしたが、そうなるもメモだけでは信用度が低いことがわかり、中古のアサヒペンタックスとコムラー三〇〇ミリを手に入れ、冬の渡りをとの気負いを肩に出かけた。いざと構えてピントを合わせようとヘリコイドをまわそうとしてもピクともしななければ、あげくのはてはシャッターさえ落ちない。カメラ屋に持って行けば、説明書を読んで使つてくださいといわれる始末である。しか

し、失敗は前進もさせてくれる。防寒の工夫、身の隠、足音、木登り、測定方法、虫よけ、食べ物等々。

オジロワシは四季折々、私にはすばらしく強烈な思い出を与えてくれた。留鳥のデイスプレーは上空でくりひろげられる愛の讃歌であり、アザラシの目をくりぬき流水上を真赤に染め込むのもドラマであり、荒海に体ごと突込み魚をくわえ上げるのに四苦八苦し、羽根を海面に打ちつけながら浮上した時の安堵感あり、断崖の原木の二メートル近い巢に流水がゆるみ始める頃に、ニワトリの卵の二倍ほどの産卵、五月初旬に一〇〇ぐらいのヒナが誕生、オスとメスが一生懸命育児にかかる。その仕草は人間に優るとも劣らない、いや、現代の一部の者よりは愛情豊かである。オスが獲物を運びメスがそれを受け取り口移して食べさせ、雨が降れば羽根を上げ、日差しが強ければ体で陰をつくり、巢を常に補修したり、産座には枯草を運び込んで体温の調整をしてやったり、それはそれは人間が恥かしくなる。

鳥達は人間のまねをしているのか、人間がまねをしているのか、想像と現実の一致が多いことに驚いた。地球上の生きものは皆兄弟である。これらが滅亡しつつあるとすれば、人間にもその影がしのび寄って来

ているということになる。人間が生きのびるためにも、残された自然を保つ手段をおこたつてはならないと思う。

(斜里町建設課長)

アボセツト（ソリハシ

セイタカシギ）との出

逢い

萩 千賀

シギ・チドリ類は、私の最も好きな鳥である。中でも、アボセツトは一目見たい！というあこがれの君であった。ところが、昭和四十六年二月七日、愛知県鍋田干拓地に一羽のアボセツトが日本に初渡来した。翌四十七年四月二十日、愛知県渥美半島田原町に四羽のアボセツトが再び渡来したのである。ある朝、NHKのテレビニュースで放映されたのは、仙台のシギ・チドリの渡来地として有名な蒲生海岸に四羽のアボセツトが美しい姿で飛翔しているのであった。私はあせんとした。愛知県から北上して蒲生に降りたのであった。次のコースは？青森県か？北海道石狩河口・鶴川河口、はかない夢を抱いたのであったが、悲しいニュースを読んでしまった。青森県尾駁沼で

一羽の死体が発見されたという。

昭和五十三年十二月の暮、アボセツト一羽東京大井の埋立地の潮入りの池に現わるという、楽しいホットなニュースを読んだ。日本で四回目になる。三回目は昭和四十八年、沖繩に一羽渡来。

昭和五十四年二月、九州の荒崎にマナツル・ナベツルを観察し、長崎県諫早の大干潟にシギ・チドリ、ツクシガモ等を存分に観察し、最後の目的地・羽田空港に降り立った。とたんに肩を叩かれた。札幌で一一緒に探鳥した鳥友二人であった。さっそくアボセツトの場所を案内しますと、わざわざ出向いて下さった。久しぶり四人で大井の野鳥公園を案内して貰い、目指す潮入りの池にアボセツトを訪ねることにした。カモメしか見当たらない、だいたい夕方、寝ぐらになっている潮入りの池に戻つてくるとのことであつたので待つことにしたが、夕方になつても私達の前に降り立たなかった。明早朝にかけることにしようと、品川のホテルに戻った。日の出とともに車で飛んで行つたら、先客がスコープで探鳥していた。私達を見つけると、三分前まで、ここに居たのですが、カモメとともに飛び去つたという。僕は三回目でも目的を達したと喜んでいて、三分前/なんと憎らしい言葉、また楽しみが増えましたと別れる。数歩歩いたとたん、

彼女は急に立ち止まり、スコープを立てて

萩さん、大変/ちよつとのぞいてみて、のぞくと、あこがれの君が目の前にいるではないか。夢のようであつた。二人で握手をして喜びに浸つたのである。神は私達を見離さなかつた。そつた嘴を左右に振りながら採餌している。時折、顔を水面に没したり、傍に居るカモメが、アボセツトにちよつかいをかけるので、アボセツトが飛翔して離れた場所に降りたりするので私達を樂しませてくれる。写真を撮らなくてはと思うが、私のレフレックスの千ミリではフア

インダーをのぞくとさつぱり見えない、彼女がスコープをのぞきながら指示してくれ、下を向いた、餌を採り出して歩き出した。こんなやりとりが続いてやつと撮影ができた。時、昭和五十四年二月十四日午前七時であつた。昭和五十六年六月上旬、北欧探鳥会に参加した。デンマークでは一般人立ち入り禁止の場所も厚意的に入れさせて下さり探鳥ができ、広い湿地のはるか彼方をスコープでみるとアボセツトではないか、あちこちに特徴あるスタイルでいるので一目でわか。嬉しかった。距離はあるがシャッターを押した。昭和五十八年六月上旬、アムステルダムからテクセル島に連絡船で渡つた。周囲八

○キロほどのこの島は水鳥の保護区が七カ所あり、年間三一〇種の野鳥が観察されるという。海、干潟、池、湿原、耕地、林と環境が野鳥の生息環境に適しているので珍しい野鳥も繁殖している。アボセツトも然り。落ちついた、けばけばしさのない静かな美しい島で、どこに行っても野生の鳥達の姿が目につく。今日はワデン湖、保護区

の入口にレンジャーが待機していた。堤防上を歩き海上を見降すようにすると、すぐ下方は湿地、沼、砂地とその中洲に数えきれないミヤコドリの様、アボセツトが私達の前に降り立った。今までで最も近いところ

ろにノそれ写真をと俄に多忙となる。よくみると、あこがれの君はあちこちに休息している。アボセツトの家族が水の中から砂地へと移動してきたところである。私はこの瞬間をどれだけ待ったことだろう。幸せ一杯のひとときである。昭和五十八年六月十四日の昼下りであった。

註 ソリハシセイタカシギ(セイタカシギ科) 英名アボセツト 全長四三cm、嘴は細く上にそり、体も白と黒、脚は淡褐色、分布は黒田長禮の『新版鳥類原色大図説』によると、ヨーロッパ、カスピ海、黒海沿岸地方から中国に至る地域に繁殖。英国王立鳥類保護協会のシンボルマークは、ソリハ

シセイタカシギである。

日本では野鳥の会山口支部がこの地に渡来することを願って会章にしたところ、夢が実現、昭和五十四年、宇部西沖干拓に一羽渡来。

(北海道生活環境部自然保護課)

精神薄弱児との ふれあいの中で

山田 倫生

私は北星学園大学社会福祉学科の四年生であるサークルに属し、精神薄弱児、いわゆる知恵遅れの子どもたちの施設へよく出かけています。

初めて、サークルの先輩につれられて施設へ行った時には、いったい、どんな子がいるのだろうかと思いついて、何をどうしたか、全くおぼえていません。そのあと、毎週一回施設へかよい、二時間ほどソフトボールを教えることになりましたが、いきなりたいてくる子、つばをはきかける子、などがいて、しばらくの間はどうしたらいいかわからず苦痛でした。

でもそのうちに、子ども一人ひとりの名前もおぼえ、また子どもも私の名前をおぼ

えてくれるようになりました。夏休みが終ったころ、子どもの一人がなにげない風ですが、私と遊びたがるようになり、一緒に遊ぶとニコニコしてくれる。すると現金なもので、その子が一番かわいく見えてきました。それが他の子どもの方にも広がって、全部の子どもたちに会うのが楽しみになってきました。もちろん最初の子が一番かわいくて、よく遊びました。やがて、その子がおかれている現実に気付きはじめました。

同じ年代の子どもは個室すら持っているのに、なぜこの子は施設にいなければならないのか、と考えているうちに、ちよつとキザない方ですが、この子たちと生きてみたい。それを職業としたいと考えるようになりました。

ところで、みなさんは精神薄弱、知恵遅れ、と聞いてどのようなイメージをお持ちでしょうか。一般的には、偏見と差別の中にある、ということだと思います。知恵遅れの子どものお母さんが一番つらいというのは、デパートなどへ子どもを連れて行った時の周りの視線だそうです。また新しい施設を建てる時の地域住民の反対は、よく新聞などに載ったりします。またいまだに、ある地域では、「あんな子と遊ぶとバカが移るよ」というそうです。

もうひとつ大きな問題は、義務教育終了後にどうしたらいいか、です。現在、高校進学率は九〇％以上ですが、全道で養護学校高等部は少なく、ほとんどの障害児は、就職するか施設へ行くしかありません。また、就職についてもまだまだ企業側の理解が低く、ごく一部の子どもだけしか機会がなく、結局、施設へ行くというのがほとんどです。国際障害者年のスローガンは、民主主義の基本ともいえる「完全参加と平等」ですが、実際はまだまだ遠いものを感じさせます。

ところで、なぜ、あの子たちと遊んでいるのが楽しいのか、と考えてみると、その時、自分が実になおに働いていることに気がきます。それは、あの子たちと会っている時は理性で自分を押しかくさず、裸の姿でふれあっているからだと思ってきました。もちろん年上としての立場は十分踏まえたうえで、どの子にも同じように自分というものをぶつけています。そうして、初めて子どもも信頼してくれることがわかりました。それはちょうど、自然の中にいる時の自分の気持とよく似ています。

だからといって、それはあの子たちが、より自然に近いからだ、とは思えません。すなおな子、ずるい子など、いろんな子がいますが、すべての子が、自分に対しても

他人に對しても、いい、悪いではなく、ごまかさないのです。つまり、私たちが他人とうまくつきあおうとしてごまかしている部分が、あの子たちには全くないのです。

そのために、自然に入っている時のような思いになるのだと思います。

こんな気持、それは喜び、といつてもいいと思いますが、もっと多くの人に理解してもらったら、自然保護にしても、障害者福祉にしても、もっともつと進んでいくと思うのですが。

それと、もうひとつ大事なことは、平和でなければ障害者福祉も自然保護もありえないということ。もし戦争にでもなれば、まっ先にきりすてられるでしょう。現在でさえ、そのような傾向にあります。だから、人間があたりまえの人間として生きていくような社会をめざすこと、それは両者の運動に共通すると思いますが、両者を進めていくことは平和を守ることに通じると思うのです。

北海道の社会福祉施設のほとんどは人里離れた所にあります。障害を持った人たちが地域に受け入れられるためにはよくないことですが反面、豊かな自然に囲まれています。もし、近くの施設で運動会などがありましたら、一緒に遊んでみてください。

(北星学園大学・学生)

二〇年ぶりの札幌

中村 玲子

中学三年から高校一年にかけての十数カ月を、札幌で暮らしたことがある。もう二〇年も前のことだ。銀行員だった父の転勤に、家族全員がついていった。いまのように「単身赴任」が一般的にはなっていないかった時代だ。

生まれて初めて飛行機に乗り、千歳空港に着いたときには、日本ではない国へ来たような気がしたものだ。視界をさえぎるものが何もない。見渡す限りの緑の野原に、滑走路だけが黒くろと走っている。山らしい山が見えないのが不思議だった。なんともあ、広いところに来たもんだと思った。空港から札幌まで車で一時間余を走って、もつと驚いた。行けども行けども道路の左右に見えるのは、牛と羊と草原ばかり。ときおり建っている農家とサイロ以外、人工の建造物はほとんどなかったと記憶している。巨大な広告塔やら看板などもなかったのではないか。季節は六月だったが、東京

のむし暑さに慣れた身には、風が寒かったのを覚えている。

わずか二年足らずの北海道生活だったが、東京ではできないことをたくさん経験した。冬の間は、学校から帰るとカバンをほうり出して日暮れまでスキーで遊んだ(それまでスキーをはいたことがなかったので、夢中だったのだ)。旅も、ずいぶん楽しんだ。

中学の修学旅行で道東をまわり、家族で函館に行き、父の銀行のお姉さんたちに連れられて、利尻・礼文までも行った。

どこに行っても、何をしても、広いなあ、大きいなあ、という感じがついて回った。

札幌の街の中心地にしてからが、そうなのだ。大通り公園をわざわざ例にあげるまでもなく、道路の幅は広いし、空き地はたっぷりあるし、高い建物は少ないし……。とにかく、のびやかで大らかな街。思い出の中、札幌は、常にそういうイメージだった。つい二カ月前までは。

一九八三年七月、八月、久しぶりに北海道をゆつくり訪れる機会があった。主に道東が中心の旅だったが、札幌にも五日ほど滞在した。

中学生のころ見知った街の姿がそのまま残っているだろうとは、むろん期待していなかったが、それにしても札幌はあまりに変わっていた。

あんなに広びろとしていた大通り公園が、ビルの壁に囲まれた箱庭みたいになってしまっている。時計台は穴ぼこの中に隠れていた家をさがしに行つて、何度も道に迷ってしまった。けつこう広い道路に面していると思つていたのに、やつと見つけた家は、露地と呼びたいような小道ぞいにあつた。

建物の外観はそのままだったが、周囲に厚い石の塀が建てられていた。庭と庭との境界に垣根も塀もつくらないのがこの街の習慣だったはずなのに……。家の庭から全貌がのぞめた藻岩山の北斜面は、わずかに上のほうがみえるだけになっている。藻岩山のてっぺんからスキーをはいたままで家まで帰ってくるなんて芸当は、もうとうていできそうにない。

人間が便利さを手に入れるのとひきかえに、街が変わっていくのはある程度やむを得ないと思う。けれども、第二の東京、第三の東京みたいな街をどんどん誕生させてしまうことには、注意深くあつていただきたい。東京は、悪いお手本なのだから。

東京において、札幌を愛するひとりからの、北海道の方々へのお願である。

(会員)

境（さかい）

赤城 泰

今年（一九八三）、長い間の私のささやかな二つの夢が叶えられた。一つは、稚内から網走まで自分でハンドルを握って走ってみたい、もう一つは、道東にトドワラをこの目で見たい、という夢。その実現のため、結果的に、道南を除く北海道の海岸線のほとんどを走ることになった。すなわち、留萌から北の日本海、宗谷海峡、宗谷岬から紋別、網走を経て知床の宇登呂までのオホーツク海、羅臼から尾岱沼経由、根室の納沙布岬までの根室海峡、そして花咲―霧多布―厚岸―釧路―えりも―苫小牧の太平洋のそれぞれの海岸線である。もし、これにかつて旅した内浦湾、積丹、江差、熊石などの海岸も加えれば、ほぼ全道の海岸線をかバーしたことになる。

了したのは、今回初めて見た浜頓別のベニヤ、およびサロマ湖の砂嘴を常呂側から入ったワツカ、の両原生花園であった。同じサロマの竜宮台も紋別のコムケもよかったが、ベニヤとワツカはまた行つて見たいところである。

漠たる中にもかれんな華やかさをたたえる原生花園の生命とは対照的な、いうなれば自然の死の姿を、私はトドワラに見た。

まだ吹く風も冷たく、訪れる人もまばらな六月下旬のある日、長さ二八キロの砂嘴、野付半島を、両側に海を見ながら車止めまで走り、そこから先はクロユリの群落の中を歩いて、やがてトドワラに着き、一周四十分ほどの木道を渡った。ここかしこに立枯れたトドマツの白い幹が墓標のように残り、足もとの湿地には倒れた枝が白骨をばらまいたように散乱していた。私は、紀元前六世紀イスラエルの予言者エゼキエルが見たという「枯れた骨」の幻を思い出した。

今回のトドマツの白骨は、今も私の臉に浮かんでくる。このほかに、今年訪れたいくつかの岬も、それぞれ私の記憶に鮮やかである。稚内の野寒布と宗谷、網走の能取、えりもは初めてではなかったが、抜海、根室のノサツブと花咲（車石も含め）、霧多布などは長く思い出に残ることであろう。

ところで、地質学者でも動・植物の専門

家でもない私が、機会があればあちこち歩きたくなるのはなぜだろうか。私はどうやら、自然が巧まずしてわれわれに提供する雄大な境（さかい）に興味があるらしい。海岸や岬に立てば、陸と海が眼前に相接し、目をさらに上げれば、遠く海と空の接線がある。道北・豊富の大規模草地放牧場のように、いくえにも重なったゆるやかな丘の曲線が空を区切つていてもよい。

人間は、日常的なこの世の営みと、それだけでは捉え切れない人生の根源的な意味の両者に、同時に関わりなければ生きることができない。つまり、境界線上に生きる動物―それが人間である。このことを想起させてくれるのが自然にはかならない、と私は考える。

境は、宗教学的に興味ある概念である。素朴な原始社会では、自分が属する集団の生活空間だけが自分たちの世界であつて、その境を越えたところは外界・異郷であり、もろもろの不幸、禍い、病気などは皆そこからくる、と考えられていた。ここに、境を防御する働きをもつ神が誕生する。境の神、サエノカミである。ムラ境に立つ道祖神は、外界との接触、交流によって危険が侵入することから村人を守り、同時に、農作物の害虫のようなトラブルが自分たちの中に起こつた時、これを追い出す（虫除け

や疫病神の追い出しなど）際を目じるとして機能した。このような民間神サエノカミは、やがて仏教との習合や地藏信仰との結合などの経過を経てさまざまに展開し、複雑な様相を呈するようになった。

私は、しかし、境の宗教学的意義を、これとは違った意味合いで考えたい。縹渺たる海岸や岬の突端に風に吹かれて立つとき、芒洋とした大湿原の只中にひとり佇むとき、あくせくとした日常の生活の中でもすれば見失いがちな永遠、無限、超越、彼岸というような事がらを、もう一度思い起こさせられる、そういう意味合いで私は自然がつくり出す壮大な境に関心を寄せるのである。私は、自然を拝むことはしない。しかし、私が日常性の中に埋没してしまいつつになるとき、その暗く深い淵の底からも一度、目を高いところに向けて、自然は、人間がそれぞれおののきとをもってその前にまかり出るべきものであつて、かりそめにもそれと戦つて征服する、などという不遜な思いを抱くべきものではあるまい。人間が考える便利さや有効性は、自然のもつ深い意義に比すれば、全くとるに足りない妄想にしか過ぎないかも知れない。

（一九八三、九、一）

（北星学園大学長）